

## 出会いは潮風とともに —SUNDAYクルージング、海の男の嫁探し—

森漁業協同組合青年部  
福田 賢一

### 1 地域の概要

僕たちの住んでいる森町は、道南渡島半島の東側、噴火湾に面した人口1万8千人の青い海と緑が溢れる町である。

雄大な駒ヶ岳の麓に開けた町は、気候が温暖で、春には桜の名所にたくさんの人々が訪れ、秋にはブルーベリー、カボチャなど様々な農産物が収穫される。

また、歴史的に見ても道内最大級のストーンサークルである鷲の木遺跡が出土したり、あの新撰組の土方歳三が戦いの場を北海道に移すべく死力を尽くし上陸した土地でもある。

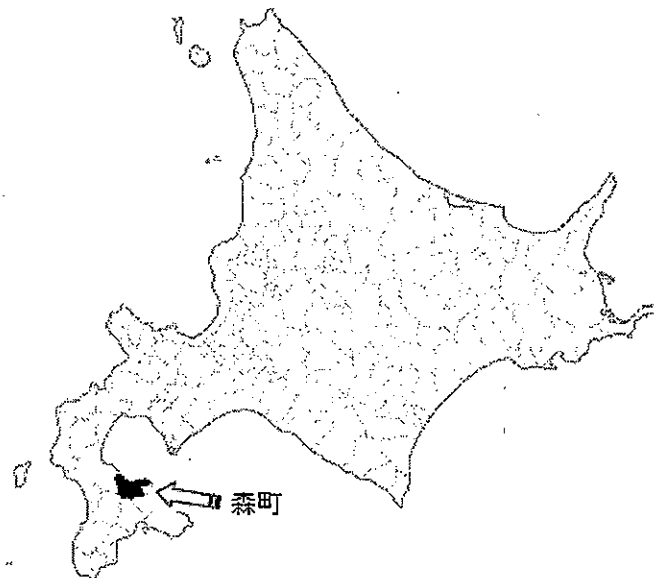


図1 森町の位置図

### 2 漁業の概要

僕たちの所属する森漁業協同組合は正組合員377名で構成されている。

平成20年の水揚げは38億円で、そのうちホタテガイ養殖漁業が25億円と約65%を占めている。

その他に定置網、底建網、刺し網などが盛んに行われている。

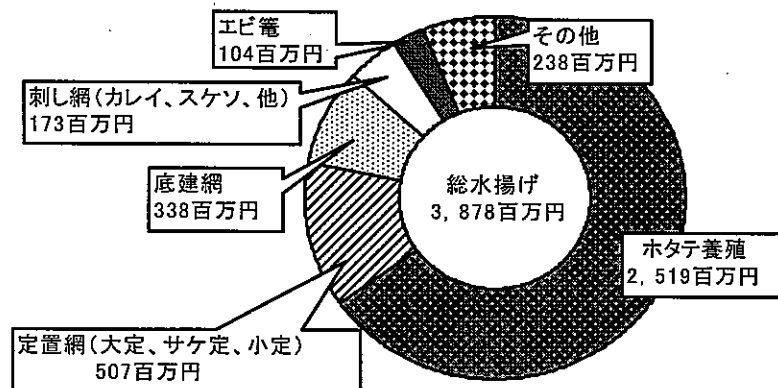


図2 平成20年森漁協漁業別生産額 (百万円)

### 3 研究グループの組織と運営

僕たちの組織する森漁協青年部は、現在は 23 名の部員で構成されていて、役員は部長 1 名、副部長 2 名、監事 2 名、その他役員 4 名からなっている。

主な活動は、これから発表するサンディクルージングをはじめ、漁港清掃などのボランティア活動、各種イベントへの参画などである。

### 4 研究・実践活動取組課題選定の動機

話は 8 年前にさかのぼる。

とにかく漁師は忙しい職業で、暇があれば沖へ出て、時化たら時化たで陸仕事が残っている。

とくに青年部員のほとんどが手がけるホタテガイ養殖は、一年間切れ間無く仕事があり、昼、夜逆転した生活は当たり前のこととなっている。

表 1 ホタテガイ養殖 (2 年養殖) 年間スケジュール

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
1年目	採苗器投入	採苗	仮分散	本分散				中間育成				耳吊り
2年目	耳吊り			本養成						出荷		

当時の僕たちは、親父たちからまだ半人前としか見られておらず、沖に出てはひたすら船の上を走り回り、親父の技を盗み、早く一人前になるため、そして、周りから信頼される漁師になるために、文字どおり日夜働いていた。

そんな中、ある時、青年部員の面々を見渡すと、部員 33 人のうち僕も含め 20 才後半から 30 才代のいい年をした、いい男が 18 人も独身だったのである。

まさしく女性と接する機会が無いと、結婚できずにいる男性の典型がここにあった。

だが、その時点では忙しさを言い訳に、「俺には沖がある」と平静に、かつ、気丈に振る舞っていたものの、ここだけの話、内心では「彼女が欲しい」「めんこい嫁さん来ないべか」とみんな思っていたのである。

いつしか部員が集まるたびにこのことが話題になり、どうやったら彼女ができるのか、どう上手いことやったら嫁さんが来るのか、既婚の部員や先輩たちからも、いろいろアドバイスを受けたりもしたが、なかなか実践には至らず、健康な男の子であれば誰もが経験する難題にぶち当たってしまった。

「このままではだめだ」

それは決してチャラチャラしたものではなく、自分の将来を考えたとき、「家庭」はなくてはならないものであったからである。

仕事の疲れを癒してくれる家庭。

明日の仕事の励みになる家庭。

♪俺が網をひくのは、可愛いお前と子供に、腹一杯飯を食わすためなんだよ♪と歌いたくなるような家庭。

僕の中には、男として責任を持って、嫁さんや子供を養うことができこそ、はじめて一人前の漁師になれるものだ、と言う信念があった。

それに 親父やお袋に孫の顔を見せて安心させてやりたいということもあった。

こうしたことは、個人差はあれ、部員みんな同じ思いであり、「そしたら青年部で何かやるべ」と話は進んで行ったのであった。

## 5 研究・実践活動状況及び成果

### (1) SUNDAYクルージングの誕生

まず、女性と出会うキッカケを作ることから話は始まり、パツと浮かんだのが合コンである。そして、普段忙しいのであれば、女性にここまで来てもらうのはどうか？という意見が出された。

もし、ここまで来てもらえるなら、自分たちの獲った海の幸で盛大に歓迎できるし、みんながいるので心強くもある。

それに、住み慣れたホームグラウンドでは飾ることのない、ありのままの自分が表現できるなど、たくさんメリットがある。

それなら、イベントとして未婚の女性を広く募集してみよう。

しかも、ただ「飲んで食べて盛り上がり終わり」ではそこら

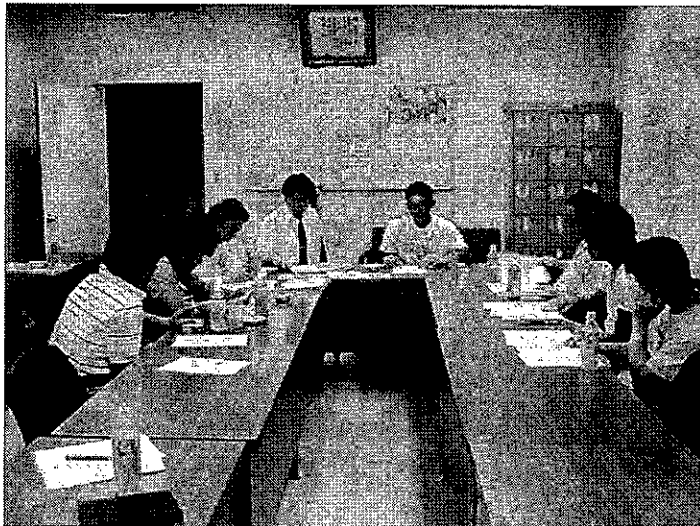


写真1 役員会の風景

の合コンと変わらないので、漁業と海の男を理解してもらうため、沖に連れて行き僕たちが一番輝いているカップ姿を見てもらおう。

どうせなら、青年部以外の独身の漁師にも声をかけてみよう。

と、話はトントン拍子に進んでいった。

何回かの話し合いを経て、開催日は平成14年9月15日の日曜日、タイトルはそのものズバリ「SUNDAYクルージング」と銘打ち、内容は、定置網の網起こし見学とバーベキューパーティー、それに、エビやホタテなどの海産物が当たる抽選会で場を盛り上げ、最後に告白タイムでカップルを誕生させる、と言うものに決定した。

告白タイムとは、告白カードに気に入った人の番号を記入し、番号の合った人同士が全員の前に出てインタビューなどを受けるものである。

開催までには、新聞、テレビ、ラジオ等へのPR活動、臨時航行許可証の取得、参加人数とりまとめ、傷害保険への加入、食料飲み物の調達、船の手配から救命具、酔い止め薬まで準備万端とりおこなった。

また、男性の参加者には、くれぐれも女性へのエチケットを守るように注意喚起も怠りなく、こうして開催に臨んだ。

## (2) 輝ける第1回 SUNDAY クルージング

当日は札幌や函館から予想を上回る35名の独身女性が参加した。

女性陣は普段乗ることのない漁船に乗り込み、雄大な駒ヶ岳をバックに、潮風を受け、漁場までのクルージング、その後、網起こしではゆっくりと手繰り寄せた網の中、水面下に魚の影が浮かび上がると一斉に身を乗り出し、「サケが見える!」「イカがいる!」と歓喜の声を上げた。

それに答えるように僕たちも、ここが見せ場と言わんばかりに網を引きテンションは最高潮に達した。



写真2 定置網見学の様子



写真3 バーベキュー内容



写真4 パーティー会場の様子

陸に戻りバーベキューパーティーでは、さっき獲れた魚や水槽に生かしておいたカニ、エビ、ホタテなどを目の前に、最初はお互いぎこちない様子であったものの、自己紹介、抽選会などを行ううちしだいに打ち解け、アルコールの力も手伝い会場は和やかな雰囲気包まれた。

やがて、告白タイムとなり結果は8組のカップルが誕生したのであった。



写真5 カップル誕生 (告白タイム)

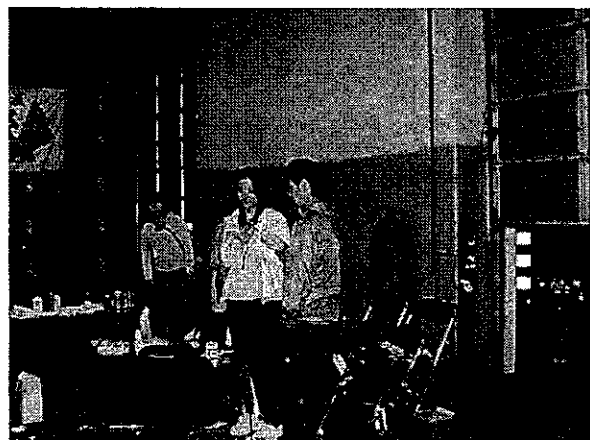


写真6 メルアド交換

### (3) 反省から生まれた結束力

こうして、第1回目の「SUNDAYクルージング」は大成功のうちに終わった。その後、このことがマスコミに取り上げられたり、参加者からお礼の手紙や、メールを頂いたことで、次回開催への大きな自信へとつながった。

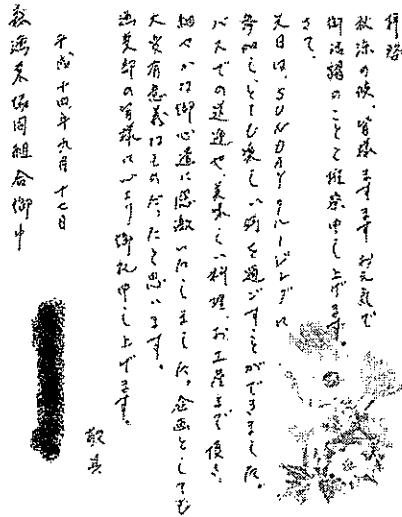


写真7 お礼の手紙



写真8 新聞記事

しかし、一部男性のマナーの悪さ、時間配分など反省点はいくつかあったが、その中でも最も大きな問題点は、なかなか会話が弾まず、お互い打ち解けるまでに時間がかかるという点であった。

最たる例が、初対面の男女であるがために、なかなか会話のきっかけがつかめず、男同士、女同士で固まってしまう場面があちこちに見られたことである。

そこで、もっと盛り上がるようなゲームを取り入れる、とか、席替えの回数を増やすなどの意見が出されたが、裏方に徹していた参加資格のない既婚部員から、準備、段取りばかりでなく、男性が女性の輪の中に入りやすくなるようなキッカケを作る役を買って出ようと言ってくれたときには、僕たち青年部の結束の強さをあらためて感じた。

### (4) 進化する SUNDAY クルージング

平成21年9月20日で「SUNDAYクルージング」は第8回目を迎えた。

その間、参加者からはアンケートをとり、宣伝方法や企画の改善に努めてきた。

その結果、ビンゴ、ダーツなどのゲームを取り入れたり、第6回目からは漁協女性部の協力のもと、魚の捌き方をメインにした料理教室も実施している。

第8回目からは、それまで遠巻きに見ていた男性陣も料理教室に参加することとなり、自慢の包丁捌きを披露する者も現れた。



写真9 料理教室

こうして、女性の参加者は、第1回目から今回まで延べ201人にのぼり、成立したカップルは32組となった。

そして、めでたく結婚へゴールインしたカップルも5組を数えた。

その中には子供もできた夫婦もあり、今ではみんなすっかり地域にとけ込んでいる。

ちなみに、僕はここでは縁がなく、5年前に地元の女性と結婚した。

しかし、当初の目的である嫁不足の解消にはある程度成果が見えてきたと自負できるころはある。

また、アンケート結果を分析してみると、意外に女性の方はせっぱ詰まった状態ではなく、観光気分で気軽に参加している人が多いことがわかった。

そうであるなら、純粹に「SUNDAYクルージング」を楽しんでもらおうと考えるようになり、僕たち自身もこの「SUNDAYクルージング」を楽しむようになってきた。

言ってしまうと、このイベントをとおして、この町を知って、漁業を知って、僕たちのことを知ってもらい結果的に嫁に来てもらえれば良いのである。

8年間も継続している大きな理由は僕たちがこうしたゆるい姿勢に変化してきたことであると考える。

その根底には、いい加減な考えではなく、よその土地から嫁さんを迎えるには、まず、自らがこの町に愛着を持ち、漁業に誇りを持たなければならないという強い思いと自信がそこにあるからである。

このように、「SUNDAYクルージング」とおした意識の変化は、青年部活動の活性化につながっており、ゆくゆくは浜の元気にまでつながってほしいと願っている。

## 6 波及効果

① アンケートでは48%の参加者が初めて森町を訪れたと回答しており、この町の良さを知ってもらうには絶好の機会であると捉え、単に嫁探しから始まったこのイベントも今や町のPRの場としての役割も担うようになってきた。

② 都市に住む女性が、今まで経験したことのない漁船に乗り、定置網を間近に見ることで漁業並びに漁師への理解が深まり、イメージアップにつながった。

③ 同じような悩みを持つ近隣漁協青年部も関心を示し、視察に訪れたり、なかには、参加願いを申し出てくる場所もあった。

## 7 今後の課題や計画と問題点

今後、回数を重ねるうちに目的意識が薄れ、惰性で実施してしまう時期が来ることもあると思われるので、マンネリ化しないような企画と、常に初心に帰ることを心がけるようにする。

また、カップルが誕生しても、結婚までとなると本人同士の事情によるものなので、僕たちとしては、嫁さんがすんなりと地域に溶け込めるように、応援してやることも役割の一つであると考えている。

最後に。

若い漁師が家庭を持ち、子供ができて、その子供がまた家庭を作る。

こうして曾祖父や祖父の代からタスキを受け継ぎ浜は現在に至っている。

だから僕たちもそのタスキを次の世代へとしっかり引継ぎ、浜を守ってゆかなくてはならない。

こうした思いを胸に止め、かといって、深刻にならず、明るく前向きに、今までどおりのスタンスで「SUNDAYクルージング」を続けてゆきたいと思う。

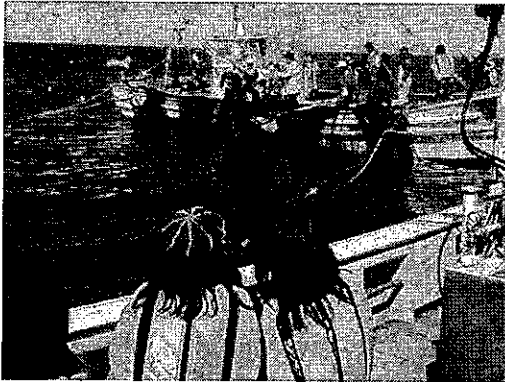


写真10 海の男はカッコイイ?



写真11 ウ～マンボウ



写真12 パーティー会場その1



写真13 パーティー会場その2



写真14 全員集合!